



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	教職大学院での学びを活かした実践報告：研究主任業務の遂行と校内研究の推進(fulltext)
Author(s)	伊東,大介
Citation	東京学芸大学教職大学院年報, 4: 103-108
Issue Date	2016-03-18
URL	http://hdl.handle.net/2309/145360
Publisher	東京学芸大学教職大学院
Rights	

教職大学院での学びを活かした実践報告 研究主任業務の遂行と校内研究の推進

伊東 大介（東村山市立青葉小学校）

1. はじめに

本報告者は、2008（平成20）年度に東京学芸大学教職大学院（以下教職大学院）を修了し、2009（平成21）年4月に現任校へ異動、勤務2年目（2010年）に研究主任を拝命した。今回、教職大学院を修了して現場復帰し、教職大学院で学んだことがどのように研究主任の業務に活かされ、校内研究に推進に役立ったかをこの紀要の紙面をかりて記録することにした。その学校の校内研究が全体的にどのように推進されたかと言うことよりも、教職大学院の修了生である研究主任が個人としてどのように業務を遂行したかということを中心に記録することが、この紀要にまとめる価値があるのではないかと判断したからである。

本報告者が、教職大学院在学中に履修した校内研究に関する科目は「校内研究・研修コーディネーターの育成（担当寺崎千秋特任教授）」である。

また、この報告では、上記の講義で学んだことはもちろん、教職大学院で学んだこと、教職大学院で得たネットワーク等、幅広く「教職大学院での学びを活かす」ととらえ報告する。

2. 現任校の校内研究テーマの変遷と研究主任業務

2002～2015年度 青葉小学校 研究テーマ一覧

2002 学ぼう・生かそう・広げよう～地域の宝 全生園～

2003～2005

思いやりをもち互いに認め合い豊かにかかわる子の育成

2006 伸ばそう！考える力！～分かる喜びを味わわせる算数指導の工夫～

2007 伸ばそう！考える力！～分かる喜びを味わわせる算数指導の工夫～
～算数的活動を通して、分かる喜びを味わわせる指導の工夫～

2008 伸ばそう！かかわり合う力！～地域の人や自然を生かして～

2009 自ら学ぶ力を伸ばそう！～地域を生かして～

2010 伝え合う力を高める指導法の工夫～地域・人とのかかわりを通して～

2011 書く力を高める～国語科を中心として～

2012～2013

国語科を中心として書く力を高める

～さまざまな学習場面での活用を視野に入れて～

2014 書く力を活かした学習活動の工夫

～書く力を高める単元・教材一覧をもとにした取り組み～

2015 『考える力を高める算数授業の工夫』

～伝え合い、学び合える子をめざして～

本報告者が、着任したのが2009年4月、研究主任拝命が2010年4月である。2009年度は研究推進委員ではあったが、研究主任ではなかった。

研究主任1年目は、まず、毎月の研究推進委員会、年7回の研究授業、OJT（校内における研修）などを「こなす」ことに精一杯であった。これを「こなせた」のは、前任の研究主任がそれまでの資料をきちんと整理・保存してくれていたからであって、これは自分も誰かに引き継ぐときにはそのようにしなければならないと強く思うきっかけになった。

その年の校内研究の年度末反省で、研究テーマの見直しが行われたが、このあたりから、次からの項目ごとに詳しく振り返ってみたい。

3. 研究推進委員会の運営に当たって心がけたこと

(1) 研究推進委員会は定刻に始まり定刻に終わるようにする

当たり前のように思われるかも知れないが、これができている学校がどの位あるだろうか。諸般の事情で開始時間が遅れることがよくあり、話がまとまらず延々と続くことが日常になっていないだろうか。

定刻開始・終了のために、推進委員会の開始時刻、場所、議題のレジメを作成し、2～3日前（少なくとも前日）には、推進委員の机の上に置くようにした。当日いきなり議題を提示したのでは、その場で一から考えなくてはならず時間がかかる。事前に提示しておけば、学年の意向なども聴いておいてもらえることもある。そのために、次回開催の内容周知を徹底した。

次にどうやって定刻に終わるかであるが、これはもう議論の途中であっても時刻が来たら終わると言うことである。そして、教務に相談して臨時研究推進委員会の開催を予定に入れてもらう。推進委員には、次の臨時研究推進委員会で一からの議論に戻らないように、「ここまでは考えてきて下さい」と「宿題」を出しておくことも一つである。

この定刻開始、定刻終了は、教師の校内研究の取り組みへの意識改革とモチベーションの向上に役立つ。まず、特に定刻終了は、授業の充実のために必要不可欠と考えている。研究推進委員会が遅くなり、予定していた教材研究、教材準備、学年会などができなくなるとは、授業を含めた教育活動の質が低下してしまう。これは、まさに本末転倒である。よりよい学習活動のための研究推進委員会が、学習の質を下げるようなことがあってはならない。また、会議の時間が限られていると言うことは、議論に無駄がなくなり、話の方向性が維持されることでもある。集中した議論が展開される。研究推進委員会＝時間超過会議（エンドレス会議）というイメージは払拭したいものである。

(2) 議論すべきことに時間をかけて議論する

これは、①と関連し「何に時間を使うか」ということである。研究主任が原案を示して、了承をとって済むような内容を議論したりせず、研究の本質に関わることを議論しなければならない。本校では、研究テーマの決定にあっては、それぞれの推進委員が、持論を展開し、妥協することなく意見を交わし議論した。そのために、臨時研推を何度も設定したが、最終的に研究推進委員会として納得するテーマを設定することができた。これが大切なことで、研究テーマの設定理由を、トップダウンやいわゆる「ではのかみ

『現代の社会では～』、『今回の学習指導要領では～』」に求めてしまうと、研究の途中で「何でこの研究をしているんだろう？」ということになる。この例は、ある程度中堅の教師諸氏であれば経験のあることと思う。

(3) 研究主任はまとめ役に徹する

「研究主任は真ん中を行け」・・・とは、教職大学院の「校内研究・研修コーディネーターの育成」での担当寺崎千秋特任教授の言葉である。「研究主任が自分の意見でぐいぐい引っ張っていくような研究スタイルは、本当の校内の教員の学びになっているのか、研究主任は真ん中にいて先を進む人（教員）、後からついてくる人（教員）をともに見る必要がある。そして学校（教員）全体が前進することが大切である」という話は、研究を進めるに当たって指針となる言葉であった。

4. 研究発表に向けて

(1) 情報収集、他校の研究発表会の参観

本校では2012年に市教育委員会指定の研究発表会を実施した。この発表会に向けた準備の中で、他校の研究発表を一定数視察した。その際留意したことは、「本校と似たような研究テーマ、同じ学校種のみにはこだわらず、広く参加して視察すること」であった。同じテーマの研究発表であると、発表も似たような内容になることが多い。それはそれで、「この学校はこの点について、本校とは違った考え方で研究した」ということが分かり、比較検討するには大変参考になる。しかし、同じ枠の中での研究であり、多様性が乏しいとも考えられる。類似した研究テーマの研究発表視察と共に、発表方法に工夫が見られる研究発表会、異校種（中学校・特別支援学校等）の発表会などからも大変有用な情報を得て、研究発表会の計画・運営に活かすことができた。これは、教職大学院で様々な研究テーマ・多様な校種（教科）の教員と学びあったことが根底にある。多様性の中からの学びは大切である。

(2) 何に労力を使うか

研究発表会は、授業公開の他に研究発表、講評、講演などの流れが一般的である。本校の発表では、研究推進委員会で「授業の充実を一番に考え、その準備に有限な時間を使おう」と話がまとまった。例えば、研究発表当日の掲示物準備におわれて、通常の授業の準備が十分にできないことなどは本末転倒ということである。通常の教育課程を進める中での研究発表であり（もちろん研究も教育課程に位置付けていることであるが）、研究発表会が「一発の打ち上げ花火」で終わらないようにすることが大切であろう（この「打ち上げ花火論」も教職大学院の講義で、院生相互の発表の中から学んだことである）。

研究紀要の内容も精選し、役立つものを残すこと、環境負荷の軽減を目指すことは論を待たない。2012年の研究発表会の翌年に行った東京都言語能力向上推進校成果発表会では、厚い紀要を廃し、リーフレットにまとめた。このリーフレットをまとめる際には、教職大学院の恩師何名かに相談し、編集方針を示唆をいただけたことはリーフレットの内容の充実につながった。

(3) 記録として残すこと

2012年の研究発表では、研究発表・指導講評・講演を一つにまとめた「フォーラ

ムディスカッション」という発表形態をとった。本校の教員と、講師、フロアーの参加者が話し合いながら進めるものである。これも、発表会当日が過ぎると、忘れ去られてしまうことが多いので、その内容を冊子にまとめ、振り返られるようにした。また、「これから研究発表会があり、研究発表の方法を工夫したいのだが、資料をもらえないだろうか」という学校にも送付し、お役に立つことができたようである。

このような学校間の連携も研究上非常に大切で、研究主任冥利につきることでもある。

5. 研究授業・研究協議会について

(1) ラウンドスタディーの導入

年に7回行われる研究授業（1～6年、専科）の協議会については、付箋や短冊を使った協議の活性化が試みられていたが、2014年からは「ラウンドスタディ」を導入した。これは、原田他（2015）考案の、「共同の知を求める参加型研修」である。4人1組での話し合いをもとに意見を交流しながら、集団全体の思考を進化させていくという手法である。この手法を導入したことにより

- みんなの意見を聞きながら、視点をもとに話し合え、よかったと思う。他グループの話の聞き、話し合えたのもよかったと思う。
- 今年からの形態ラウンドスタディーは、皆が主体的に参加でき、かついろいろな考えを聞けるので非常に良いと思います。
- 交流しやすく良い。途中で分かれるのはいろいろな意見が出て良い。分かれることで深まりきらないもどかしさもある。

などの意見が教員から寄せられた。ただし、この方法も、学校の実態に合わせて進化していかなければならないことは自明であろう。

(2) 気軽に相互授業参観

研究授業以外にも、授業観察の機会が必要である。私は、年に数回B5版の略案を作成し、その授業に興味のある教員には参観に来てもらっている。そうしなくても「いつでもどうぞ」と呼びかけている。また、「この授業ちょっと見に来て！」と私からお誘いして見てもらうときもある。要は、授業の相互参観の日常化である。また、若手から「算数の授業見に来て下さい」と要請があれば、時間の許す限り行くことにしている。授業記録は、教職大学院で小山田特任教授から学んだ「巻物式」が大変便利である。授業記録を授業者と観察者で同じ方向から眺めて授業の振り返りができるからである。

いわゆるお堅い「研究授業」以外の、日常的な相互授業観察は、授業充実のための有用な手段である。

6. OJT（校内における研修・授業研究以外の内容）の工夫

①ワールドカフェの手法を取り入れて

本校では、OJT（校内における研修）の一環として「ラウンドテーブル」を取り入れられている。年に3回程度、テーマを決めて職員がテーブルを囲んで話し合う。企業などでも会議の一手法として行われているいわゆる「ワールドカフェ」をアレンジし、話し

やすい雰囲気第一に、教員が校内のタイムリーなテーマについて話し合う。4人1組、教職経験年数、担当学年・教科、ジェンダーバランス等考慮して決定する。最後に「発表」などは行わず、それぞれが話し合ったことを成果とする。※結果が必要なときはまとめをする。

これも「校内研究＝固い話」のイメージを打破し、授業について気軽に話し合ってもらうための一つの策である。

このヒントを得たのは、教職大学院時代に福井大学で参加したラウンドテーブル及び、京都大学E. フォーラムで参加したワールドカフェ的な話し合いである。

7. 今後の課題として

研究担当者としての業務を振り返ってみたが、これから先、校内研究の課題となるものは何であろうか。いろいろ細々とした「課題」はたくさんあるが、私としては「校内研究の成果はどのようにしたら積み上げることができるのか」ということが最大の関心事である。

日本全国の学校が、毎年「校内研究」「現職研修」として授業研究等を繰り返していく中で、その「成果」はどのように積み上がって次年度へ活かされ、引き継がれていくのだろうか。何万という学校が、年に何回も研究授業を行い、その成果が僅かずつでも蓄積され、次に活かされていくとしたら、すでに日本の学校の授業は、毎時間毎時間が非の打ち所のない模範的なものになっていなければならないのではないだろうか。しかし、現状でそのようなことはあり得ない。

現任校では、毎回の研究授業での学びは、それを学んだ教師の授業の中で活かされていくことはもちろん、年間を通した学びも同様に教師の力量形成に直結している。個々の教師の力量の伸びが校内研究の成果であることは論を待たない。

ここでいたいことは、教師個人としての力量向上の他に、校内研究システム自体の向上は図れないかということである。

児童が入れ替わり、教師が入替わり、授業で扱う内容も入れ替わる学校現場において、どのような授業が最善であるのかを探るのが校内研究だとして、研究テーマが変わったり、人が変わったりした場合に、また一から全て作り直していくような研究ではなく、言わば校内研究の「土台」になるような部分を引き継いでいくことができれば校内研究の推進に非常に効果的ではないだろうか。

つまり、研究テーマが変わったとしても、教員の意識を含めた研究の態勢ができていくことが大切なのではないかと考えた訳である。

そのためには、ある程度長期的な視点で校内研究を眺めてみる必要もあるだろう。私は校内研究を幸いにして6年間担当して、このように思うようになった。前任者から引き継ぎ、仕事を「こなす」ことに終始していた段階で、別の分掌に変わっていたら、この文章をまとめることもなかったであろう。

また、もう一つは、学校間の連携である。研究発表にいくと「○○小メソッド」「○○小スタイル」「○○方式」などの、その学校独自の研究成果を活かしたネーミングに出会う。この内容が、多くの学校で活用されるためには、「研究発表会」で発表するだけではなかなか難しい。研究担当者（研究主任）の連携による情報交換は有効と考えられる。「研

究主任会」を開催している市区町村もあるが、学校間の情報交換にどの程度力点をおいているかは様々であろう。

また、せつかくの教職大学院のネットワークを活かして、修了者による校内研究に関する交流会・勉強会なども考えられる。これは、昨年度発足した教職大学院同窓会などの組織を有効活用することも考えられる。

8. むすびに

前号に引き続き、教職大学院年報に掲載してもらうには本当にお恥ずかしい拙い実践内容をここに報告しようと思ったきっかけは、「教職大学院での学びの還元」がほんの少しではあるが、毎年実行できていることを知ってもらいたかったからである。

(前号では「課題研究をもとにした授業実践事例報告－博物館活用のポイントをおさえた『むかしのくらし』の授業」と題して課題研究の内容を還元した授業を報告した)。

大学院修了後7年目を迎えるが、学んだ成果の還元がやっとできてきたと実感できるようになった。成果の還元は、一朝一夕にできるものでもなく、数値化できるものだけでなく、修了者のライフステージに合わせてなされていくものだと考えるようになった。担任として還元できること、研究主任として還元できること、教務主任として還元できること、副校長・校長として還元できること、行政系から還元できること……それぞれである。

今回は、自分の校内研究担当者としての業務を振り返った。ここで最も活かされたことは大学院で学んだ「協働」ということである。校内の職員の意思疎通と信頼関係がなければ、よい校内研究ができるわけではない。私の拙い研究推進委員会運営を支えてくれた推進委員各位に感謝したい。また、研究推進委員会の決定した内容を最大限に尊重した学校運営をしてくれた校長には、仕事の内容で恩返ししなければならないと思う。一人の教員がどんなに「すばらしい」といわれるような授業を展開したからといって、それが校内研究の成果ではない。職員が、日々の授業の改善、自己革新に喜びを見いだせるような雰囲気醸成されれば校内研究は自然に充実していくのではないかと考え、試行錯誤する毎日である。

参考資料

原田三朗、石井英真、黒田真由美（2015）探究を続ける教師集団へ ラウンドスタディの手引き～共同の知を求める参加型研修の提案～ 科学研究費補助金助成研究 26907016 リーフレット